

田祐吉

萬葉集全註釋十四

萬葉必携 下

角川書店



(全十四卷・第十三回配本)

昭和三十一年九月三十日 初版發行
昭和三十九年八月三十日 四版發行

增訂萬葉集全註釋 十四 萬葉
必携(下)

定價 八百圓

著者 武田祐吉

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八番
電話九段區〇一一(代表)一五

(落丁・亂丁本はお取り替えます)

凡例

一 この一冊は、増訂萬葉集全註釋のうち、萬葉必携の下として、萬葉集の語句の索引辭典を收める。
一 まず語・句を平假字で標記し、次にこれに相當する漢字を出し、品詞を記し、解釋を下し、用例を示した。括弧の中の數字は用例の所在である。解釋は、見出しの下の漢字だけでは理解しがたいものこれを記した。

一 各項目にあげた語・句に相當する漢字は、代表的なものを擧げるとどめた。

一 體言のうち、動植物はその科名を、人名は時代・生歿年・その作品の所在をも附記し、地名はその所在地を記した。用言はその活用の種類をも記したが、助動詞についてはこれを省略した。また、枕詞は「枕詞」と記し、用例の前にその係かる語をも揭示した。なお、連語には「句」の名稱を附した。

一 用例は、五例以内のものは、なるべくすべてを掲げることにしたが、それ以上のものは省略した。但し語によつては六例以上を擧げたものもある。助詞は代表的なもの、または特殊なもののみにとどめた。
一 語・句の所在のうち、「題」とあるは題詞、「註」とあるは左註、「別」は、一はいふ、或はいふ、或本に云ふ等の註記を有する別傳の意で、「右」「下」とあるは、上記以外の、歌詞の右方または下方にある註記を有するものの中にみえる例の意である。

一 見出しの語句のかなづかい、及び配列は、歴史かなづかいによつた。

一 この萬葉語句索引辭典の編集については、尾崎暢殃君からすくなからぬ援助を得た。

見返し寫眞説明

安治麻野 福井縣武生市味眞野の小丸城址から南方の展望。右側の低地が涌
水地帯、左側の家屋は神社である。天平年間、中臣の宅守が流寓した地と
傳えられる。巻の十五後半参照。

撮影 水島直文

澁谿の崎 富山縣氷見市の東南端、日本海に面するところ。大伴の家持等が
しばしば遊覧した。

撮影 高道夕咲人

萬葉必携(下)

萬葉語句索引辭典

あ

あ 吾(我)代名詞(例)あを待たすらむ(五八九〇)。あが爲は照りや給はぬ(五八九九)等。

あうぢのおきしま 阿氏の奥島(人名) 奈良時代の人。生没年未詳。卷五八四。(例)少監阿氏奥島(五八四下)。

あいが 愛河(名詞) 人間の愛欲を河の流れにたとえた語。(例)愛河の波浪(五七四四、右)。

あうら 足ト 足占(名詞) 歩數の如何によつて吉凶をうらなう占法。(例)夕占問ひ足トをぞせし(四七三三)。門に出で立ち足トして(十三三〇〇)。

あえぬがに あえぬがに(句) こぼれ落ちそうに。(例)あえぬがに花咲きにけり(八二五七)。水草の花のあえぬがに(十三三三)。

あか 垢(名詞) (例)妹が衣の垢づく見れば(五五三六)。著せし衣に垢つきにけり(十三三八)。白妙衣垢づくまでに(十三三八)。

あがおも 我が面(句) 私の顔。(例)我が面の忘れむ時は(十四三二五)。

あがき 足掻(名詞) (例)青駒の足掻を速み(二二三三)。赤駒が足掻を速み(十四三三四)。赤駒の足掻く激に(七二四二)。赤駒の足掻速けば(十二三三〇)。この吾が馬の足掻の水に(七四三三)。

あかきころ 赤き心(句) (例)隠さはぬ赤き心を(二四四六五)。

あかぎぬ 赤帛(名詞) 赤い織物。(例)赤帛の純裏の衣(十三三九七)。

あがく 足掻く(動詞四段) (例)赤駒の足掻くたぎちに(七二四二)。

あがこ 我が兒(句) (例)手に持てるあが兒飛ばしつ(五九四四)。珠に勝りて思へりし吾が子にはあれど(十三三三〇)。

あがこころ 我が心(句) (例)我が心二行くなもと(十四三三三)。

あがこころ 我が心(枕詞) 明石の浦。(例)あが心明石の浦に(十五三三三)。

あがこころど 我が情神(句) (例)あが情神の和ぐる日もなし(九四七七)。

あがこひ 我が戀(句) (例)あが戀は現前もかなし(十四三三三)。吾が戀のみし時無かりけり(十四三三三)。霍公

鳥もとなな鳴きそあが戀まざる(十三三八)。あが戀を記して附けて(十三三三六)等。

あがこひす 贖祈す(句) 贖物を神にささげて祈る。(例)幣帛奉り贖祈すなむ妹がかなしき(二四三三)。

あかこま 赤駒(動名) (例)赤駒の越ゆる馬柵の(四三三三)。赤駒に倭文鞍打置き(五八四四)。赤駒を山野に放し捕りかて(二四四七)。赤駒が門出をしつつ(十四三三三)。赤駒を打ちてさを牽き(十四三三三)等。

あがこま 吾が駒(句) (例)歩め吾が駒(十四三三三)。

あかざるきみ 厭かざる君(句) (例)厭かざる君や明日別れなむ(十三三七)。厭かざる君を山越に置きて(四四九三)。

あかし 明し(形容詞・ク活) (例)日は明しといへど(五八九三)。

あかしおほと 明石大門(地名) 兵庫縣の明石海峡。(例)としひの明石大門に(三三三三)。

あかしがた 明石潟(地名) 兵庫縣の明石の潟。(例)明石潟潮干の道を(六九四四)。

あかしかねつも 明しかねつも(句) 夜をあかすのが難儀だ。(例)獨し宿

れば明しかねつとも(十一六二)。

あかしつらくも 明しつらくも(句)
夜を明かしたことだ。(例)明しつらくも長きこの夜を(四八五)。

あかしのうら 明石の浦(地名) 兵庫縣の明石の海岸。(例)見渡せば明石の浦に(三三六)。吾が心明石の浦に(三三六)。

あかしのと 明石の門(地名) ↓あかしおほと。(例)明石の門より大和島見ゆ(三三五)。座待月明石の門ゆは(三三六)。明石の門より家のあたり見ゆ(三三六)。

あかしのとなみ 明石の門浪(句)
(例)明石の門浪いまだ騒けり(七三三)。

あかしのみと 明石のみと(地名)
明石川の河口。(例)吾が船は明石のみとに傍ぎ泊てむ(七三三)。

あかす 明す(動詞・四段) (例)夜はも息つき明し(二二二)。宿に今夜は明して行かむ(六二四)。冬の夜の明しも得ぬを(九一七)等。

あかす 明す(動詞・四段) (例)漁る火は明して燭せ(三三六)。(例)飽かず 飽かず 飽かず 吾行や妹と問ひし公はも(三三七)。(例)飽

かずのみ相見るものを(三三三)。
あがすめがみ 我が皇神(句) (例)住吉のあが皇神に(二三四)。

あがたのいぬかひのすくねきよひと 縣の大養の宿禰淨人(人名) 奈良時代の人。生没年未詳。(例)縣の大養の宿禰淨人(二三四)。(註)

あがたのいぬかひのすくねひとかみ 縣の大養の宿禰人上(人名) 奈良時代の人。生没年未詳。卷三、四九。(例)縣の大養の宿禰人上(三四九)。(註)

あがたのいぬかひのすくねもちを 縣の大養の宿禰持男(人名) 奈良時代の人。生没年未詳。卷八、一五六。(例)縣の大養の宿禰持男(八二五六)。(註)

あがたのいぬかひのすくねよしを 縣の大養の宿禰吉男(人名) 奈良時代の人。生没年未詳。卷八、二五五。(例)縣の大養の宿禰吉男(八二五五)。(註)

あがたのいぬかひのひめとね 縣の大養の命婦(人名) 名は三千代、光明皇后の御母。「一七三年」。卷十、四三三。(例)縣の大養の命婦(九四三三)。(題)

あがたのいぬかひのをとめ 縣の大養の娘子(人名) 奈良時代の人。

生没年未詳。卷八、一六三。(例)縣の大養の娘子(八二五三)。(題)

あがため 吾が爲(句) (例)吾がためは狭くやなりぬる(五八五)。

あがちだ 班田(名詞) (例)天平元年、班田の時云云(二、四四五)。(題) 班田の史生云云(三、四四五)。(題)

あかちつかはす 班ち遣はす(動詞・四段) 手わけして派遣する。(例)伴の部を班ち遣はし(六九七)。

あかつ 分つ 班つ(動詞・四段) (例)神分ち分ちし時に(二二六)。(伴の部を班ち遣はし(六九七))。

あかづく 垢づく(動詞・四段) (例)白たへ衣垢づくまでに(十二三六)。(例)妹が衣の垢づく見れば(三三六)。

あがて 我が手(句) (例)稻春けば職る我が手を(三四五)。(例)あが手と著けるこれの針持し(二三四)。

あかとき 曉(名詞) (例)あかときの寢覺に開けば(六二六)。(例)今夜の曉降ち(十二三六)。(例)曉と鶏は鳴くなり(十二三六)。(例)秋の夜は曉さむし(七三九)。(例)曉に名告り鳴くなる霍公鳥(六四八)。(題)

あかとときつき 曉月 夜の明け方の月。(名詞) (例)さ夜ふけて曉月に影見えて(九四八)。

○。くれなゐの赤裳のすその(十七、三九六)。

あからがしは あから柏(名詞) 樹
属の落葉喬木。○例 稻見野のあから
柏は(三十三四二)。

あからたちばな 明ら橋(名詞) 色
づいて美しい橋。○例 明ら橋影に見
えつつ(十八四六〇)。

あからひく 赤らひく(枕詞) 日、
膚、数妙の子、朝。○例 赤らひく日
も暮るるまで(四六九)。朱らひく膚
に觸れず(十一、三九九)。朱らひく敷
妙の子を(十二、九九七)。朱らひく朝行
く君を(十一、三九九)。

あからをぶね 赤ら小船 赤く塗つ
た船。(名詞) ○例 沖行くや赤ら小
船に(十六、三六六)。

あかり 明(名詞) ○例 月讀の明すく
なき(七、一〇七五)。

あがり 我許(句) 私の家。私のも
と。○例 愛しき夫ろが吾許通はむ(十
四、三五四)。

あがる 揚る(動詞・四段) ○例 雲雀
あがり情悲しも(十九、四二五)。朝なさ
な揚る雲雀なりてしか(二十、四三三
三)。雲雀あがる春べとさやになり
ぬれば(二十四、四三三)。散る花の天に飛

び上り(十七、三九六)。

あかるたちばな 熟る橋(句) ○例 熟
る橋鬚華に指し(十九、四二六)。

あき 秋(名詞) ○例 秋立てば黄葉か
ざし(二、一九)。秋の野に露負へる萩
を(三十三、八八)等。

あき 阿騎(地名) 奈良縣宇陀郡松
山町の南方の追間村附近の地。○
輕の皇子の安騎野に宿りたまひし
時(二、四三〇、右)。み雪降る阿騎の大
野に(二、四三〇)。

あきがぜしは 秋柏(枕詞) 潤和川。
○例 秋柏潤和川邊の(十一、二四六)。

あきかぜ 秋風(名詞) ○例 秋風の寒
き朝けを(三、三六六)。秋風の吹きにし
日より(六、一五三)。秋風は冷しくな
りぬ(十一、三三三)。秋風吹きて月かた
ぶきぬ(十三、三九六)等。

あきかぜの 秋風の(枕詞) 千江の
浦。○例 秋風の千江の浦みの(十一、三
三三)。

あきかたまけて 秋かたまけて(句)
秋を待ち設けて。○例 またも相見む
秋かたまけて(十五、三九九)。

あきはら 商變り(名詞) 一旦す
んだ商取引を後に變約すること。
○例 商變り領らすとの御法(十六、三
九六)。

あきくさ 秋草(名詞) ○例 秋草に置
く白露の(三十三、三三三)。

あきくさの 秋草の(枕詞) 結びし
紐。○例 秋草の結びし紐を解くは悲
しも(八、六二二)。

あきこぐぶね 秋棹ぐ船(句) ○例 牽
牛の秋棹ぐ船の(十二、四七五)。

あきさ 秋沙(動名) 雁鴨科の鳥。
あいがも。○例 山の際に渡る秋沙の
(七、二二三)。

あきさらば 秋さらば(句) 秋にな
つたら。○例 秋さらば今も見ると(如、
八四)。秋さらば見つつ思へと(三、四
六六)。秋さらば影にもせむと(七、三
三三)。秋さらば妹に見せむと(十三、
三七)。秋さらば黄葉の時に(十七、三九
六)等。

あきさりごろも 秋さり衣(名詞)
秋になつて著る著物。○例 秋さり衣
誰か取り見む(十二、四三三)。

あきさる 秋さる(句) 秋になる。○
例 秋さるて山邊を往けば(六、三九九)。
あきされば 秋されば(句) ○例 秋さ
れば露立ち渡る(六、九三三、三、四三三、
三、四三三)。

あきされば 秋されば(句) ○例 秋さ
れば置く白露に(十、三六六)。秋
されば置く白露に(十、三六六)。秋
されば置く白露に(十、三六六)等。

あきさる 秋さる(句) 秋になる。○
例 秋さるて山邊を往けば(六、三九九)。
あきされば 秋されば(句) ○例 秋さ
れば露立ち渡る(六、九三三、三、四三三、
三、四三三)。

あきじこり 商じこり 買いそこな

い。(名詞) 例 買ひにし絹の商じこりかも(七二三四)。

あきた 秋田(名詞) 例 秋田の穂立

繁くし念はゆ(八二五七)等。

あきたかる 秋田刈る(句) 例 秋田

刈る假廬もいまだ壊たねば(八二五七)。

秋田刈る假廬の宿(十三三〇)。

秋田刈る苦手揺くなり(十三三七)。

秋田刈る旅の廬に(十三三三)等。

あきたつ 秋立つ(句) 例 秋立てば

黄葉かざせり(二二九六)。

秋立ちて幾日もあらねば(八二五七)。

秋立つ待つと妹に告げこそ(十三三〇)。

斯くしこそ見し明らめ秋立つ毎に(十三三三)等。

あきたらず 飽き足らず(句) 例 こ

もり沼の下に戀ふれば飽き足らず(十三三九)。

いや懐しく聞けど飽き足らず(十三四五)。

あきたらねこそ 飽き足らねこそ

(句) 満足しないから 例 荒津ま

で送りぞ來つる飽き足らねこそ(十三三二)。

あきたらめやも 飽き足らめやも

(句) 例 今のみに飽き足らめやも

(六二九三)。

今日のに飽き足らめやも(十三四八)。

あきづ 蜻蛉(動名) 直翅目、蜻蛉

科。トノボ類の昆蟲の總名。例 蜻

蛉羽の袖振る妹を(三三六六)。

あきづ 秋津(地名) 奈良縣吉野郡

秋津野のあたり。例 秋津の小野の

野の上には(六九六六)。

秋津の小野に刈る草の(十三三三)。

石倉の小野ゆ秋津に(七二二六)。

秋津邊に來鳴きわたるは(九二二五)。

あきづかみ 現つ神(名詞) 例 現つ

神わが皇の(六二五五)。

あきづく 秋づく(動詞・四段) 例

秋づけば尾花が上に置く露の(八二五七)。

秋づけば水草の花の(十三三七)。

秋づけば丹の穂にもみつ(十三三六)。

こほろぎの鳴く聲聞けば秋づきにけり(十三三〇)。

今よりは秋づきぬらし(十三三三)等。

あきづしま あきづ島(枕詞) やま

と。例 あきづ島大和の國は(十三三三三)。

秋津島大和の國を過ぎて(十三三三三)。

秋津島大和の國の(十三三三三)。

あきづの 秋津野(地名) 奈良縣吉

野郡。吉野離宮の在つた一帯の地。例 秋津野にたなびく雲の(四六九三)。

秋津野のかきつばたをし(七二二五)。

秋津野を人の懸くれば(七二四〇)。

秋津野の尾花刈り副へ(十三三九三)等。

あきづのかは 秋津の川(地名) 吉

野の秋津の地を流れる吉野川の一部。↓あきづ。例 み吉野の秋津の

川の(六九二一)。

あきづののべ 秋津の野邊(地名)

吉野離宮の在つた秋津の附近の名稱。例 花散らふ秋津の野邊に(二二二六)。

あきづのみや 蜻蛉の宮(名詞) 例

み芳野の蜻蛉の宮は(六九七七)。

あきづのそ 蜻蛉の小野(地名)

吉野離宮附近の野原。例 み芳野の

蜻蛉の小野の(六九六六)。

み吉野の蜻蛉の小野に(十三三三)。

あきづは 秋つ葉(名詞) 例 秋つ葉

にははる衣(十三三三)。

あきづば 蜻蛉羽(名詞) トンボの

羽。すき通つた衣服の譬喩。例 蜻

蛉羽の袖ふる妹を(三三七七)。

あきづひれ 蜻蛉領巾(名詞) 蜻蛉

の羽のような美しい薄い領巾。例

蜻蛉領巾負ひ立め持ちて(十三三二四)。

あきづべ 秋津邊(地名) ↓あきづ。

③秋津邊に來鳴きわたるは(九一七)

あきののやま 安伎奈の山(地名)
所在不明。④足柄の安伎奈の山に
(十四三三三)。

あきの 秋野(名詞) ④蓋しくも秋
野の萩やしげく散るらむ(十三五
四)。秋野には今こそ行かめ(十三五
一七)。ささ鹿の胸分け行かむ秋野芽
子原(十三五三三)等。

あきのあめ 秋の雨(名詞) ④秋の
雨にぬれつつ居れば(八一五五)。

あきのおほきみ 安貴の王(人名)
藤原時代から奈良時代にかけての
人。生没年代未詳。卷三三六卷四
五(四四長、五五、卷八、五五五) ④安貴王
(三三六)題等。

あきのか 秋の香(句) ④盛ち盛り
たる秋の香のよさ(十三三三)。

あきのかぜ 秋の風(句) ④簾うご
かし秋の風吹く(四六八六六六六)。

面やは見えむ秋の風吹く(八一五
五。晩鯛の鳴くなるなへに秋の風
吹く(十三三三))。

あきのくに 安藝の國(地名) 廣島
縣。④安藝の國長門の島にて(五十三
六七題)

あきのた 秋の田(句) ④秋の田の

穂の上に霧らふ朝霞(二八八)。秋の
田の穂向の寄りの(二二四)。秋の田
の穂田の刈ばか(四五五)。秋の田の
穂向のよりの片よりに(十三三七)
等。

あきのつくよ 秋の月夜(句) ④去
年見てし秋の月夜は(十三三二)。秋の
月夜はわたれども(十三三四)。心なき
秋の月夜の(十三三三)。

あきのつゆ 秋の露(名詞) ④秋の
露は移しなりけり(八一五四)。秋風
に靡ける上に秋の露おけり(八二五
七)。

あきのとき 秋の時(名詞) ④秋の
時花種なれど(十九四三三)。

あきのながよ 秋の長夜(句) ④秋
の長夜を寝ね臥してのみ(十三三三)
あきのの 阿騎の野(地名) 奈良縣
宇陀郡。④阿騎の野に宿る旅人(二
四)。

あきのの 秋の野(句) ④秋の野の
み草刈り草き(一七)。秋の野の草花
が末を(八二五七)。秋の野に咲ける
秋芽子(八二五七)。秋の野にさを鹿
鳴きつ(十三三七)。秋の野を朝行く
鹿の(八二六三)等。

あきののうへ 秋野の上(句) ④高
圓の秋野のうへの(八二六〇)。高圓

の秋野の上の朝霧に(十三三九)。

あきのの 秋の葉(句) ④秋の葉の
にはへる時に(七三三九)。秋の葉の
黄色つる時に(十九四三三)。秋の葉の
にはひに照れる(十九四三三)。

あきのほ 秋の穂(句) ④秋の穂を
莖におし靡べ(十三三五)。

あきのももよ 秋の百夜(句) ④秋の
數多くの夜。④秋の百夜を願ひつ
るかも(四三三)。

あきのやま 秋の山(句) ④紅の緑
色に見ゆる秋の山かも(十三三七)。

あきのゆふかぜ 秋の夕風(句) ④
乏しくもあらず秋の夕風(十三三三)
あきのよ 秋の夜(句) ④秋の夜の
霧立ちわたり(十三三四)。秋の夜の
百夜の長さ(四三三)。秋の夜の月か
も君は(十三三九)。秋の夜を長しと
言へど(十三三三)。秋の夜は河し清
けし(十三三四)等。

あきのをさおびとまる 商の長首麻
呂(人名) 奈良時代の防人。生没
年未詳。卷三、四四。④商長首麻
呂(十三三四)註。

あきはぎ 秋芽子(名詞) ④鶉鳴く
古りし里の秋はぎを(八二五八)。

秋萩を妻問ふ鹿こそ(九一七)。わ
が待ちし秋萩さきぬ(十三三四)等。

あきはぎの 秋芽子の(枕詞) しな

ひ。例秋はぎのしなひにあらむ妹が姿を(十二三六四)。

あきやま 秋山(名詞) 例秋山の木の葉を見ては(一六二六)。秋山の樹の下がくり(三三九三)。秋山の黄葉を茂み(二二二六)。秋山に落つる黄葉(二二三七)。秋山の色なつかしき(十三三三三)等。

あきやまの 秋山の(枕詞) したぶる妹、したび。例秋山のしたぶる妹(二二三七)。秋山のしたびが下に(十三三九)。

あきらけく 明けく(形容詞・ケク) 例明けく吾が知ることを(十六三六六)。あきらけき名に負ふ伴の緒(二十四六六)。

あきらむ 明む(動詞・下二段) 例御心を明め給ひ(十六四四四)。見し賜ひ明めたまひ(十六四四四、三十四六六)等。

あく 明く(動詞・下二段) 例鶏が音なき明けば明けぬとも(十二三三二)。明くらむ分きも知らずして(十二三六五)等。

あく 飽く(動詞・四段) 例飽くまで人に見る兒を(四九三三)。飽かず吾行く(十五三三〇)。朝な朝な見れども君は飽くこともなし(十二三三三)等。

あく 開く(動詞・下二段) 例朝戸開くれば見ゆる霧かも(十三三三三)。結ひてし紐を解きも開けなくに(十三三三三)等。

あくた 芥(名詞) 例みな綿か黒き髪に芥し著くも(七三三七)。

あくのうら 飽の浦(地名) 所在未詳。例飽の浦の清き荒磯を(七二六七)。

あくまでに 飽くまでに(句) 例飽くまでに人の見る兒を(四九三三)。飽くまでに相見て行かな(十七三九九)。

あくら 飽等(地名) 所在未詳。例紀の國の飽等の濱の(十三三九五)。

あくるあした 明くる朝(句) 例明星の明くる朝は(五九九四)。明くる朝逢はずまに(十三三三三)。

あげ 上(名詞) 高い場所にある水田。例水を多みに上種蒔き(十三三三三)。

あけぐれ 明闇 夜明け方の薄ぐらいつ頃。(名詞) 例明闇の朝霧隠り(四九三三)。

あけくれば 明來れば(句) 例明け來れば浪こそ來寄れ(十二三三)。明け來れば朝浪立ち(六九三三)。明け來れば柘のさ枝に(十二三三三)。明け來ればい立ち向ひ(十九三三七)等。

あけされば 明けされば(句) 例明けされば潮を干しむ(十三三三六)。明けされば榛の小枝に(十三三三七)。

あげたかばの 上竹葉野(地名) 所在不明。例妹が髪上竹葉野の(十三三三三)。

あけたつ 明立つ(動詞・四段) 明け方になる。例明立たば松の小枝に(十九三三七)。

あけてしはた 擧げてし機(句) 例いにしへ擧げてし機も(十三三二六)。

あけぬ 明けぬ(句) 例淺野の雉明けぬとし立ち響むらし(十三三六六)。夜船を擧げて明けぬとも(十三三三三)。

あけぬした 明けぬ時(句) 夜の明けたとき。例夜なは來なに明けぬ時來る(十四三三六)。

あけのそほふね 赤のそほ船(句) 船體を赤く塗つた船。例赤のそほ船沖に擧ぐ見ゆ(十三三三三)。引きのぼる赤のそほ船(十三三三三)。

あけまくをし 明けまく惜しみ(句) 明けようことが惜しくて。

あく 朝月夜明けまく惜しみ(六二五)。
あく 明く(動詞・下二段) 例 明けむ朝か山のもみちむ(八二五)。明けぬべく千鳥數鳴く(七〇七)等。
あく 開く(動詞・下二段) 例 住吉の粉濱の蜆開けも見ず(六九七)。玉匣開き明けつと(四九五)等。
あこ 吾子(名詞) 例 通はすも吾子(十三三三)。此の吾子を(九四三)。
あこ 綱子(名詞) 地曳綱を引く者(例) 綱子ととのふる海人の呼び聲(三二六)。
あこ 阿胡(地名) 所在未詳。例 阿胡の潮干に玉は拾はむ(七二五)。阿胡の海の朝明の潮に(七二五)。阿胡の海の荒磯の上に(十三三三)等。
あごねのうら 阿胡根の浦(地名) 所在未詳。例 阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ(二二)。
あごねのはら 阿後尼の原(地名) 所在未詳。京都府の宇治から山科に行く間の地名であらう。例 瀧の屋の阿後尼の原を(十三三三)。
あごのうみ 阿胡の海(地名) ↓ あご。例 阿胡の海の朝明の潮に(七二五)。阿胡の海の荒磯の上に(十三三三)。阿胡の海の荒磯の上の(十三三三)。

あごのうら 英虞の浦(地名) 三重縣。例 阿胡の浦に船乗りすらむ(十三三三)。
あごのかりみや 阿胡の行宮(地名) 所在未詳。例 阿胡の行宮に御しき云云(一四四、註)。
あごのやま 阿胡の山(地名) 三重縣志摩郡安慮。例 阿胡の山五百重隠せる佐堤の埼(六六三)。
あさ 朝(名詞) 例 坂鳥の朝越えまして(一四四)。朝の咲み夕べ變らひ(九四四)等。
あさ 麻(植名) 草本類、桑科。例 庭に立つ麻手刈り干し(四七五)。妹背の山に麻蒔く吾妹(七二五)。小垣内の麻を引き干し(九二八)。
あさ (名詞) 未詳の語。例 小波の波越す安暫に(十三三三)。
あさい 朝宿(名詞) 例 君聞きけむか朝宿か寝けむ(十一四九)。
あさか 朝香湯(地名) 所在不明。例 朝香湯山越しに置きて(十一四九)。あさか湯潮干のゆたに(十四三三)。
あさかげ 朝影(名詞) 例 朝影に吾が身はなりぬ(十三三三)。あみまがり朝(十三三三)。

影見つ(九四九)。朝影に待つらむ妹が(十三三三)。
あさがしは 朝柏(枕詞) 関八河。例 朝柏関八河邊の(十三三三)。
あさがすみ 朝霞(名詞) 例 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞(二八八)。朝霞やまず棚引く龍田山(七二八)。
あさがすみ 朝霞(枕詞) 八重山こえて、春日の暮、香火屋が下、ほのかに。例 朝霞春日の晚れば(十一八六)。朝霞八重山下に(十三三三)。朝霞香火屋が下に(十三三三)。朝霞はのかにだにや(十三三三)。
あさかぜ 朝風(名詞) 例 宇治間山朝風さむし(一七五)。朝風に浦浪さわき(六二五)等。
あさかのうら 浅香の浦(地名) 大阪市の住吉神社の南方の地。例 住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな(二二三)。
あさかのみこ 安積の皇子(人名) 奈良時代の人。「一七四年」。集中に歌なし。例 安積皇子(一四七、題)。
あさかは 朝川(名詞) 朝、渡渉する川。朝の川。例 船並めて朝川渡

り(一、三六)。いまだ渡らぬ朝川渡る(二、二二)。佐保川を朝川渡り(三、四八)。

あさがほ 朝貌(植名) 草本類。木槿説・桔梗説・旋花説・牽牛子説等がある。例また藤袴朝貌の花(一、三三〇)。朝顔は朝露負ひて咲くといへど(十二、二〇四)。いちしろく色には出でじ朝貌の花(十三、三三四)。

あさがほの 朝顔の(枕詞) 穂には咲き出ぬ。年さへこそと。例朝顔の穂には咲き出でぬ(十二、三三七)。朝貌の年さへこそと吾は放るがへ(十四、三三〇)。

あさがみの 朝髪(枕詞) 思ひ亂れて。例朝髪(枕詞) 思ひ亂れて(四、三三三)。

あさかやま 安積香山(地名) 福島縣安積郡にある山の名。例安積香山影さへ見ゆる山の井の(六、三三〇)。

あさがらす 朝鳥(名詞) 例朝鳥早くな鳴きそ(十二、三三九五)。

あさかり 朝獵(名詞) 例朝獵に今立たすらし(一、三三三)。朝獵に鹿猪踐み起しぬ(三、四六六・六九六)。朝獵に君は立たしぬ(九、四三七)。朝獵に五百つ鳥立て(十、四四二)等。

あさきこころ 浅き心(句) 例浅き心を吾が思はな(十六、三三七)。

あさぎぬ 麻衣(名詞) 例麻衣に青衿著け(九、一三七)。柿の穂の麻衣著るは(十三、三三四)。

あさぎり 朝霧(名詞) 例明けくれば朝霧立ち(六、九三三)。朝霧の棚引く小野の(十二、二三八)。朝霧の棚引く田るに(十九、四三四)等。

あさぎりぐる 朝霧隠る(句) 例明間の朝霧がくり鳴く鶴の(四、三三六)。朝霧の棚引く(四、三三六)。

あさぎりごもる 朝霧隠る(句) 例曉の朝霧隠りかへらばに(十三、三三三)。朝霧の棚引く(四、三三六)。

あさきり 朝霧の(枕詞) おほに、八重山こえて、思ひ惑ひ、亂るる心。例朝霧の薔に相見し(四、三三九)。朝霧の八重山越えて(十二、三三九)。朝霧の思ひ惑ひて(十三、三三四)。朝霧の亂るる心(十七、四四〇)。

あさぐも 朝雲(名詞) 例朝雲に鶴は亂れ(三、三三四)。

あさくら 朝倉(名詞) 例朝倉益人(人名) 奈良時代の防人。生没年未詳。卷十、四四五。

あさくら 朝倉(名詞) 例朝倉益人(人名) 奈良時代の防人。生没年未詳。卷十、四四五。

あさけ 朝明(名詞) 例今朝の朝け雁がね開きつ(八、一五三)。君に戀ひ寐ねぬ朝けに(十三、三三四)。宿ねず起きたる朝明には(十三、三三四)等。名兒の海の朝けの餘波(七、一五三)等。

あさけ 朝明(地名) 三重縣三重郡に屬す。例朝明の行宮におはしましし時(六、一三三)。

あさけのかすみ 朝明の霞(句) 例朝明の霞見れば悲しも(十九、四四九)。

あさけのかぜ 朝けの風(句) 例朝けの風は秋寒しも(八、一五三)。

あさけのしほ 朝明の潮(句) 例朝明の潮に玉藻刈りてな(十二、三三七)。

あさけのすがた 朝明の形(句) 例わが夫子が朝明の容儀(十三、三三三)。

あさけのつゆ 朝明の露(句) 例廊がねの寒き朝明の露ならし(十二、三三六)。

あさこえ 朝越え(句) 例坂鳥の朝越えまして(二、四四四)。黒髪山を朝越えて(七、三三四)。

あさこぎ 朝漕ぎ(名詞) 例朝漕ぎしつづ唱ふ船人(十九、四四五)。

あさこぐふね 朝漕ぐ船(句) 例朝漕ぐ舟も沖に寄る見ゆ(七、一三三)。

志太の浦を朝漕ぐ船は(十四、三三〇)。
あさごち 朝東風(名詞) 朝、東から吹く風。朝東風に井堤越す浪の(十一、三七)。
あさごちのかぜ 朝東風の風(句) ↓あさごち。朝東風の風に副ひて(十二、三五)。
あさごと 朝毎に(副詞) 朝ごとに御言問はさず(十二、六七)。朝ごとに吾が見る屋戸の(八、六六)。朝ごとに洞み枯れ行く(六、四三三)。
あさごらも 麻衣(名詞) 麻衣著ればなつかし(七、一五)。新島守が麻衣(七、三六五)。白妙の麻衣著(二、九)。
あささ (名詞) 髪飾りであらうが、不明。眞木綿もちあささ結ひ垂り(十三、三三三)。
あささはを 浅澤小野(地名) 大阪府住吉南方の地。住吉の浅澤小野の杜若(七、三三)。
あささらず 朝離らず(句) 朝毎に。朝離らず雲居たな引き(三三、三三三)。朝離らず行きけむ人の(三、四三三)。朝さらず來鳴きとよもす鶯の聲(六、一五五)。朝さらず露立ち渡り(十七、四〇三)。朝さらず會ひて言問ひ(十七、四〇三)。

あさされば 朝されば(句) 朝になると。朝されば妹が手に纏く(平三、七)。
あさしのはら 浅小竹原(名詞) 神南備の浅小竹原の(十一、三七四)。
あさしほ 朝潮(名詞) 朝潮江より朝潮満ちに(十三、四九六)。
あさじも 朝霜の(枕詞) 消なば、消易き命、消ぬべく。朝霜の消なば消ぬとふに(二、一九)。朝霜の消やすき命(七、三三三)。朝霜の消なば消ぬべく(十一、四四八)。朝霜の消ぬべくのみや(十二、四四五)。
あさたち 朝立(句) 朝立ちもの朝立ちいまして(三、三三三)。鳥じもの朝立ちい行きて(二、三三三)。群鳥の朝立ちゆけば(六、一四七)。群鳥の朝立ち去なば(七、四四八)。群鳥の朝立ち去に(三、四四八)。
あさだのむらじやす 麻田の連陽春(人名) 奈良時代の人。生没年未詳。卷四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。
あさだのやす 麻田の陽春(人名) ↓あさだのむらじやす。大典麻田陽春の作(五、八八四)題。
あさぢ 浅茅(植名) 印南野の浅茅おしなべ(六、九四)。わが門の浅茅

色づく(十二、九六)。わが屋戸の浅茅色づく(十三、三〇)。八田の野の浅茅色づく(十三、三三)。眞葛延ふ小野の浅茅を(十一、六八五)等。
あさぢがうへ 浅茅が上(句) 浅茅が上に照りし月夜を(七、二七)。松蔭の浅茅が上の(八、六五五)。春日野の浅茅が上に(十二、一八〇)。
あさぢがうらば 浅茅が末葉(句) 吾が門の浅茅が末葉(十三、六八〇)。
あさぢがはな 浅茅が花(名詞) 吾が屋戸の浅茅が花の散りぬる見れば(八、一五五)。
あさぢがはら 浅茅が原(名詞) 春花抜く浅茅が原の(八、四四九)。春日野の浅茅が原に(十三、三三六)。
あさぢのうら 浅茅浦(地名) 所在不明。對馬島の東海岸であらう。對馬島の浅茅浦に到りて(十五、三三三)題。
あさぢはら 浅茅原(名詞) 原後見むために標結はましを(七、三三三)。浅茅原小野に標結結ふ空言を(十一、四六六)。浅茅原刈標さして(十一、三三三)。浅茅原小野に標結ふ空言も(十一、三三三)。浅茅原茅生に足踏み(十二、三三三)。
あさぢはら 浅茅原(枕詞) つばら